

■随想

郷里から受けた基層文化の刺激

「七三の手習い」で詩吟を

小島麗逸（高4回）

ヤンチャ小僧の面影が浮上して

二〇〇六年七月に下伊那教育会に招かれ、専門の現代中国について講演をする機会に恵まれた。

聴衆は大部分、小中学校の先生方であるが、公開講演らしく高校時代の在郷の友人も数名来てくれ、その日の夕刻、小生のために二〇余名が宴会を催してくれた。一九五二（昭和二十七年）年の卒業だから、五〇有余年ぶりに会う友人も何人かいた。

皆それぞれ、それなりの貫禄のある老い方をしている。当初は誰だかわからなかったが、十分、二十分もすると、忽然としてヤンチャ小僧の面影が浮び上がり、懐かしさは一入であった。

参集してくれた友のなかで若干名、詩吟をやっている者がおり、それを束ねているのが平澤秀明君であること



●こじま・れいいつ
昭和9年下久堅生まれ。一橋大学卒。アジア経済研究所にて中国経済研究に従事。後半は大東文化大学に移籍して学部長・理事を歴任し、平成15年退職。現在、北京大学・北京外語大学客員教授をとめる。

がわかった。彼は「日本詩吟学院岳風会」という全国組織の理事長を務めていたことも判明した。以前、在京の同級会で何回か会ってはいしたが、このことは全く知らなかった。

そうこうしているうちに、小学校時代を過ごした旧下久堅村の友人から一通のハガキが届いた。この友人は学校を終えて以後、家業の農業を継ぎ、庭師を生業としていた。詩吟奥伝の資格をもって何十年も下久堅で弟子をとっている。小生が平澤君の友人であることを知って手紙をくれた。平澤君に、在住する山梨県大月市で詩吟を教えてくれる人を紹介してほしいと依頼していた頃である。

退職した後、「サンデー毎日」で心が趣味へ動き始め、「七三の手習い」を始めたばかりのときだった。会員となって、毎月配布される岳風会の雑誌を見ていて、飯

田下伊那地区の詩吟人口の密度が極めて高いことを知った。その人口密度の高さは、山梨県東部地区とは較ぶべくもない。

郷里・下久堅の山奥に似て

東京から山梨県大月市に移り住んだのは今から三十五年前。理由は単純で、四人の子供が成長するに伴い、我が収入では六人家族を収容できる家を持つことができなかったため、流れ流れて高尾以西の大月まで来てしまった。

そこまで流れるのなら、いつそう十八歳までやっていった農業と植林ができる山奥へと、大月駅からさらに十キロも離れた山中に入った。この数年間、猪や白鼻芯の農作物荒しに悩む山奥であり、ちょうど小学校時代を過ごした下久堅の山奥に似ている。

引越して来た頃、驚いたのは、昔からいきづいてきた基層文化が数多く残っていることだ。俳句の会、書道サークル、大正琴クラブ、盆栽の会……。これらの文化運動は年一回の氏神様の祭りのときに結集して披露される。何回か集落の人に誘われたが、現役時代は本職が忙しすぎたのと、勤務先の研究所への通勤時間が片道二時間以上で、さらに片手間の農業もやらざるを得ず、断わり続けてきた。

当地と較べると、飯田下伊那地区の基層文化の濃度はかなりのものようだ。

飯田高校の同級生の一人に後藤総一郎君がいる。すでに物故しているが、明治大学の教授をやり、のちに同大学の理事になった人物で、遠山出身である。彼は遠山地区の祭りや舞踏などの文化運動を発掘し、整理することに傾注した。また、長期に亘って定期的には、故郷で常民文化教室を主催していた。

詩吟——日本独自の発明文化

話は若干飛ぶ。専門の現代中国研究で一九七三年からしばしば中国へ行く機会があり、現在も北京大学と北京外語大学で客員教授をしていて講義に行く。

昨年、北京外語大学に行ったとき、日本語の教授である金満生という方と話す機会があった。億万長者にでもなれそうな漢字名を持っているが、満州族である。現在、満州語は博物館入りし、本人も喋れないと言う。

この御人、飯田市をよく知っている。平澤秀明君のことも知っていた。その理由は、彼の細君が南信州新聞社で研修を受けたことがあるためだということがわかった。また、平澤君は同新聞社を支えたうちの一人である上に、詩吟の団を引率して何回か漢詩巡りをしていたら



畑を望む

しい。

詩吟の題材で漢詩が占める比重ははなほど大きい。ただ中国には「詩吟」という形式の文化はない。これは日本独自の発明文化である。

日本の古代、中世の文化を多く受け入れている。その最たるものが漢字であり、暦であり、今の京都の都市計画である。しかし、漢字や一般言語をみると、日本人の言語能力に溶かして定着させているように思える。

例えば、シトシト雨が降る、ザアザア降るとか、雪がシンシンと降る、とかいう片仮名の部分の擬声語は中国では極めて少ない。日本語はこの擬声語、擬態語の表現

がとても豊富である。

自分をみつけ出したいと思う昨今

その最たるものが俳句の季語で、これを中国語や英語に訳そうとしてもピットリする言葉のみつけられない。いつかアメリカの友人に、「古池や蛙飛びこむ水の音」を訳してやろうと苦労し、結局果たせなかつたという経験がある。あの水に飛び込んだ際の「ドブン」という音感を想像させる言葉がみつからない。

一つの言葉から人の情感で想像させる表現力は、英語や中国語には日本語ほどないのではないか。それだけ粗野な言語であるのかとさえ思える。われわれの祖先が育んできた基層文化には繊細な情感をかきたてる文化能力があるのではないかとさえ思う。

近代化とは画一化である。それなくして発展できなかった。しかし、これによって失うものも大きい。野菜でも肉でもマニュアル通りに育てられたものと、伝統のものとは味が違う。砂糖で味つけされた甘味と市田柿の甘さは違う。市田柿には上品な芸術品の甘さがある。

「七三の手習い」で始めた詩吟であるが、飯田下伊那地区での広がり深さを知り、現役時代の職業で失った自分をみつけ出したいと思う昨今である。